

末 黒 野

すぐろの

12月号

(通巻916号)



秋桜

落日の色を散らして鱗雲
笹藪を抜けて木道水澄めり
神杉の杜の深さや法師蟬
朝顔の色ねぢりたる蕾かな
秋海棠夕べの路地の雨意の風
宿場町の早も暮れ初め酔芙蓉
稜線の伸びのきはやか九月来る
見えてゐる風は山より秋桜
対岸の秋の灯の列潮の声
稲刈を急かするやうや風育ち
藤の実のぶらりぶらりの重さかな
思ふまま散るひつじ雲秋澄めり

森清堯

葛の花

方位盤灼けるや指せる北の国
空蟬のすがる朝の戸口かな
白日の雲の百様秋めきぬ
夕さりの葉蔭に匂ひ葛の花
秋めくやまだきに暮るる茜空
秋涼や竹の葉擦れの音の中
眠られぬ闇を刻みぬ鉦叩
隣る家の跡地や突と雁来紅
酔芙蓉まだ酔ひ浅き昼下がり
町川の水面のきらや風の色
針山の糸の縫れや乞巧奠
白秋や波に崩るる砂の綾

岡野里子

桐の実

黒滝志麻子

(顧問)

石垣の石みな小ぶり青蜜柑
 薄原うねりて風の重くなる
 桐の実の乾く音せり散歩道
 産土の星のこぞるや秋祭
 太梁の峡の湯宿や茸汁
 蓑虫や糸にたしかな息づかひ
 白日を水面に散らし蘆の花
 何もなく二百十日の乙夜かな

甲矢集

黄鵠鵠

石黒興平

子の愚知を聞く縁先や蚊の名残
 ひぐらしや先師の訃報きくあはれ
 亡夫へと庭の一輪菊の酒
 文月や書き残すこと多々あれど
 長き夜やいづこへ止る救急車
 ベットより眠れぬ夜や夜の蟬
 夕暮の時ををしむか秋の蟬
 小流れの石を選びて黄鵠鵠
 星飛んで願ひごとなどなき齡
 秋場所や鬣肩力十の乱れ髪

山行録

菅野日出子

利根支流不明少女の夏帽子
 少年の頃の思ひやさくらんぼ
 里山の路の白百登山道
 星沈みゆく函嶺や乱れ萩
 轟然と鳴る里山の猪おどし
 故郷や蔵王透きけり葡萄棚
 朝霧の尾瀬沼を擁く燧ヶ岳
 穂高連峰端に霧湧く槍ヶ岳
 海鳴の九十九里浜月の屑

筑波嶺

森清信子

筑波嶺を閉ざす雲湧き鳥威し
風おこす稲田広がり筑波山
蝸の頻る城址や草の丈
城跡にもものふの声秋の声
城跡をぐるりと土塁鬼やんま
目に入る捨田や秋の麒麟草
校倉を支ふる丸太秋湿
蟬しぐれ古物商めく蔵の内
筑波嶺を祠る蕎麦屋や秋灯
相槌の度に開かれ秋扇

浦の秋

牛の尾の動きの止まぬ残暑かな
新涼や更なる赤きペンケース
故郷の小振りなる駅カンナ燃ゆ
実石榴や身振り手振りの法話聞き
子に頼る心も少し流れ星
路地猫の一警事の無き厄日
鶏鳴の高き台風一過かな
鯖雲や見送り多き実習船
朝顔を褒め合うてをり垣根越し
弧を描く水脈一舟の浦の秋

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



菖蒲

加藤静江

純白の菖蒲ひと本濁り池
荒崎や茅花流しの吹き渡り
鐘楼を囲む静寂や今年竹
大水車苔を茂らせゆつたりと
蜻蛉生るはや風と遊びて風となり
行き合ひの空や流るる秋茜
秋の蝶舞ふや港の見える丘

地動説

小田嶋野笛

稲の波

高木邦雄

すれちがふ伽羅の香りや避暑の客
紙魚走る白銀のきら師の句集
晩夏光ガレの硝子に昼の星
贅肉を持って余しをり敗戦忌
村雲へ黄金を分くる盆の月
地動説を疑つてをり秋の雲
秋の虹けさ碁敵と死に別れ

暮れ初むる月山据ゑて稲の波
雁渡る金波銀波の相模灘
早暁や駿馬の弾く牧の露
天高し磨崖仏より鳶翔り
寒蟬の一声ありて杜の黙
野阜のゆるき坂道虫時雨
白露なる空に残れり丸き月

藍の穂

長尾タイ

折り返す八十路てふ道赤のまま
筆先に走る緊張秋の声
秋暑し鼓動高鳴る診察日
標立つ右か左か葛の花
蘆の穂や一筋重き風の道
鹿垣の鉄扉の施錠下山道
読み返す考の手紙や虫すだく

白露

池乗恵美子

不死男忌の蟬の一徹ひもすがら
みんなの果てて薄暮の静寂かな
蟬時雨の読経のごとし原爆忌
断捨離の進まぬ夫や鉦叩
別腹を幾つ持てるや生身魂
万葉にむすぶ白露朝日影
いにしへの色を零して式部の実

蕎麦の花

今村千年

山畑は雲に紛れて蕎麦の花
長雨や落ちかねてゐる桐一葉
朝顔に負けぬ名札や幼稚園
啄木鳥や好みのリズムあるらしく
うら返り空うら返し秋の蝶
絶唱のごときつくつくぼうしかな
天辺の星入れかはる夜半の秋

律の風

大川輝美

白じらと明けゆく空や稲の花
施餓鬼会や柄さまざまの杖並び
千屈菜を解す朝風谷戸の道
蒼穹官の三峰渡る律の風
秋灯下ルーペ片手にルピを追ふ
そば立つる耳闇の底より初ちちろ
あたら夜の雲寄せつけず今日の月

茄子の馬

太田良一

朝顔を咲かせ不在の駐在所
跳ぬるには狭き仏座や茄子の馬
田の神の帰る山里秋の風
騒ぐ子の飛び出す路地や秋祭
手を耳に聞く波音や秋の声
蛇穴に入る明日の家事は後廻し
世話役の座持ち上手や今年酒

秋の虹

岡田史女

ビルの端に片根をかけて秋の虹
秋虹の七色あはき朝かな
爽やかや日矢の差しくる竹林
竹林の昼深閑と秋澄めり
色変へぬ松や障壁乗り越えて
苔なせる石仏群や赤とんぼ
爽籟や水清らなる滑川



青炎集

森清

堯選



新潟

五味紘子

横浜

渡辺美智子

泣く赤子庭を占めたる紅蜀葵
日当たりの空き地一面月見草
墓石へへばりつきたり雨蛙
ぼんぼんと叩きて採りぬ大西瓜
とろとろの冬瓜汁なり齋の膳
肩を揉む女兒の手付や敬老日

横浜

布施由岐子

秋暑し朝の漢方薬熱く
院内はマスクマスクや秋扇
はじめてのスマホ決済老の秋
レトルトのカレーで済まし震災忌
折り合へぬ空の軋みや秋の雷
ためらひて旅の中止や秋燕

横浜

小原紀子

迎火や夫の帰りを図りかね
白桃や剥けば身内の痛むやう
枝豆の甘さ引き出す藻塩かな
更新の敬老パスや涼新た
新涼や昼のメニューの新しく
秋高し朝な夕な体重計
郵便夫の来秋夕焼を背にして
朝よりのへりの轟音震災忌
桐の実の神楽鈴めき空中に
そぞろ寒暗渠流るる水の音
窓近く黒き小机出して秋
禅寺の明き一郭竹の秋

町田

伴秋草

横浜

和田慈子

トンネルを抜けて秋天甲斐盆地
高原に響く声明秋の蟬
処暑の日や高原の空雲厚く
鳳仙花弾けし頃の二十代
葉を転び露の伸びたり縮んだり
夜嵐や道に小さき栗の穂

夏痩せやしまひ忘れのワンピース
耳遠き夫との会話夜の秋
盆荒や転ばぬことを旨となし
雲一朵円海山の空澄む日
枝豆の莢積む卓の日暮かな
色変へぬ松鬘鏢と卒寿翁

大網白里

亀卦川菊枝

大網白里

岡井マシミ

朝顔やここだ恋しき家郷の日
啄木鳥や鎮守の杜の黙深き
草の戸を出でたもとほり月の畔
月影をよぎり機影の二つ三つ
あひ老いて粥炊く夕べ法師蟬
崖を打つ波音高し山葡萄

千日紅匂友帰りに暮るる庭
爽涼や背筋直ぐなる心地して
枝豆の殻盛り上げて佳境なり
見つけたる郷の名前や桃売場
咲き継ぎてまだまだだと牽牛花
残り一房無人仮屋の黒葡萄

横浜

梅田武

町田

中野千代子

ひぐらしの声といたたく夕餉かな
健脚の馬を設へ魂迎へ
値は問はず舌鼓なる秋刀魚かな
アンカーのガッツポーズや天高し
末長き二人の絆とろろ汁
足早の夜の帳や秋の雨

秋めくや小上がりに置く小座布団
秋色を重ねる和菓子崩しけり
日の欠片のともしへ移り秋の宿
ささくれの光る格子戸秋日射
さびしさを拡ぐる小げら朝まだき
手作りの梅酢に開き菊脰

耕 土 集 岡野 里子 選



盆帰省老舗和菓子のみやげとし
新聞の活字の重き残暑かな
店先の人気の葡萄粒の照り
長き夜や昭和時代のヒット曲
過ぎし日を省みる夜や酔芙蓉

横浜 毛利 直子

やはらかき日差しの朝や秋の色
秋めくや池の小舟に鳥一羽
秋夕焼孤峰の空と海の色
秋雨や苔むす庭の色深み
穂芒や風にゆだぬる雲の雫

三浦 田中由紀子

翳す手に弾むかけ声踊笠
マンシヨンの周りを囲み木槿垣
両断や二人がかりの栗南瓜
露の玉南天の葉に宿りけり
虫除けを腰にぶら下げ松手入

横浜 大庭美智代

土用あい漁火遠く波高く
手火花や静かに寄する波の音
ひれ追つて金魚掬ひの子等無言
公園へ犬集合や蟬時雨
仙台の球児泥んこ天高し

横浜 吉田千恵子

寒蟬や茶席の香り鎮もりて
野に在りて野にも思ふ吾亦紅
振り向けば道の消えたり芒原
秋風の何処へ行くや窓に吹き
仁王立ちへのへのもへの破案山子

横浜 梅津まり子

タワークレーン入道雲に挑むかに
緑蔭や猫腹見せて石の上
風に乗り旅する種や虞美人草
秋風にたゆたふ菅の無心かな
しあはせのまろき塊桃かをる

横浜 丸山佐伎子

本年も試食は烏落花生
小望月不夜城めける海ほたる
風立ちて布の如くや秋すだれ
栗弾け実の輝ける散歩道
久びさの野球観戦秋日和

狭山 谷安喜美子

水澄むや溪に響ける若き声
虫の音に浸りつ家路はや暮れて
渡り鳥の飛来を待つやカナラマン
糠漬の紫紺のつやや秋茄子
暮れ際の路地の端よりきりぎりす

狭山 小山すみ子

砂浜に思ひ出残し夏終はる
茹でたての唐黍齧る円居かな
夜の楽し虫の管弦楽団来
集合は風呂敷の旗芋煮会
痩せ牛の鼻息荒し牧帰り

宮城 京極 久也

菱の実の届かぬ枝や風の沼
狂ひ咲く木瓜異常気象の秋を
コスモスの丘に背伸びす夕間暮
秋晴れやテニスコート石拾ひ
西瓜下げ半分づつよ友も後家

横浜 佐々木澄子

疫病療養小さき香水忍ばせて
粥啜る夫婦の寡黙白露の夜
満月の影の降臨浄土めく
草の絮小庭なれども我が聖地
満月の結ぶ旧知や詠み交はし

横浜 岩崎 藍

秋夕焼をまぶしく見たり丘の上
大きくて小さくて柿庭の木に
母と来し公園秋の色に染め
甘柿の今年数増し空青し
ぶらんこをこれでもかやと空高し

横浜 堺 昌子

語部へ耳傾けり敗戦忌
急坂や残る暑さを道連れに
流れ藻の埋める浜や秋暑し
堀端に居眠むる背鯨日和
星月夜誰にともなく語りかけ

横浜 喜田 君江

不來方城の啄木歌碑や空高し
曲屋の馬屋の暗し豊の秋
古寺の静かさに鳴き残る蟬
朝顔の右へならへに朝日さす
桃洗ふ郷の息吹を両の手で

横浜 佐藤 勝代

小川玉泉先生追悼句集

行く春の天の泉地へ立たれけり
なほさらの師のこゑ胸に秋の声
清らなる泉は今も滾々と
聖五月師のほほゑみの天へ召し
一灯の欠けて虚ろや雁渡し
ひぐらしや先師の訃報きく哀れ
すれ違ふごとの目差風涼し
師の金句標に行かむ星月夜
蓮の花見てをらると思ひしが
新緑の中や師の影見失ふ
星月夜偲ぶ恩師の影深し

森清 堯
岡野 里子
黒滝志摩子
森清 信子
菅野日出子
今村 千年
高木 邦雄
小田嶋野笛
岡田 史女
大川 暉美

蓴舟沼は静かに雨を受く
師の笑みの浮ぶ夜空や後の月
海坂に沈む日輪秋夕焼
師の句書く夫人の筆や鉦叩
師の色紙を偲びて卓や秋灯下
末黒野の教へはいまも小鳥来る
夫婦して同じ雅号や二つ星
秋深く俳句の御指導謝意深く
添削の手腕絶妙紫苑かな
身に入みて師の温顔と句短冊
蒼穹へ発ち給ふ師や秋の水
師の教へ永久に輝く星月夜
色なき風と海渡り富士に消ゆ
身に入むや今此処我と師の言葉
菊枯る師の色紙見つ独り酒

加藤 静江
太田 良一
和田 慈子
岩上 行雄
荒井 貞子
橋場 美篤
上月 智子
占部美弥子
大内 由紀
戸田 澄子
沼崎 千枝
池谷 鹿次
小林 清子
山崎 稔子
木下 晃